

## C. K. オグデンの Basic English 普及戦略 ：日本の英語教育問題への関心を手がかりに

広川 由子

C. K. Ogden's Strategies for Promoting Basic English in Pre-war Japan

HIROKAWA Yoshiko

### 1. はじめに

ベーシック・イングリッシュ (Basic English, 以下 BE) とは、1929 年に英国の言語学者オグデン (Charles K. Ogden, 1889-1957) らが考案・発表した簡素化英語であり、わずか 850 語で 2 万語分に匹敵する意味を表すことができるというものである。極端なまでに語数を削減しているが、オグデンによれば BE はあくまで自然言語の一形態である。

BE の目的は、次の三点に要約される。すなわち、第一に国際補助語たること、第二に非英語母語話者の英語学習の負担軽減、第三に英語母語話者の思考の明晰化である<sup>1</sup>。

BE は 1929 年 1 月発行の国際的学術雑誌 *Psyche* に発表<sup>2</sup> されると、すぐに日本の英語教育界においても注目を集め、中学校における英語教育の非効率性を改善しようとしていた岡倉由三郎 (立教大学教授) らを媒介として日本に受容された。その後、1933 年から 6 年間にわたって米国ロックフェラー財団の支援を受け、日本を含む東アジアへの普及が推進された。日中戦争勃発後、支援は打ち切られたが、日本の敗戦が確定し連合軍による占領が開始され GHQ/CI&E と日本の文部省との間で英語教育改革についての協議が始まると、CI&E は文部省に新制中学校用のはじめての英語教科書の執筆過程において BE を参照するよう繰り返し指示を出している。占領期日本における英語教育改革において、占領軍の主導のもとに BE の普及が目指されていたのである<sup>3</sup>。

以上のように BE は日本の英語教育改革に一定の影響をもたらしたものといえるが、そもそもオグデンが BE を考案した背景には、19 世紀末から活発に展開されていた人工言語運動があり、オグデンはこれに対抗したのだった<sup>4</sup>。人工言語は、ラテン語が衰退するなか、国際間のコミュニケーションを容易・円滑にするために特別に考案された国際補助語である。その代表格であるエスペラント (Esperanto) は、あいまい性や非論理性をなるべく取り除き、特定の民族集団に属さないことを理念としつつ、国際的平和主義のもとに考案された。このようなエスペラントと自然言語である BE とは本質的に相容れないものだったはずである。なぜなら、自

然言語を国際補助語として位置づければ、母語話者と非母語話者の間に優劣が生じ反発・疑念が起こることが予想されるからである。したがって、人工言語に対抗しようとしたオグデンは、人工言語理念を乗り越えるだけの BE 普及戦略を有していたとみるべきだろう。

以上の問題意識を起点として、本稿はオグデンの BE 普及戦略を明らかにすることを目的とする。

オグデンの BE 普及戦略については、日本における BE の包括的な研究である相沢の研究においても十分説明されていないように思われる<sup>5</sup>。また、非英語母語話者への英語教育史を明らかにしたホワット (A. P. R. Howatt) の研究<sup>6</sup>や、国際言語学の立場から BE を論じたシューベルト (K. Schubert) の研究<sup>7</sup>、人工言語運動史の立場から BE を捉えたラーズ (A. Large) の研究<sup>8</sup>も同様に、オグデンの BE 普及戦略にまでは踏み込んでいない。

本稿は相沢らの研究成果を敷衍しつつ、以下の二点を課題とする。

第一に、オグデンがエスペラントにどのような論理で対抗しようとしたのかを再検討する。この点を相沢は、人工言語における生活感覚の希薄さでもって説明している。これに対して本稿は、オグデン自身の論理に即して説明してみたい。

第二に、オグデンの日本への「まなざし」を明らかにする。注目すべきことにオグデンは、BE の発表時から日本の英語教育問題について言及している<sup>9</sup>。東アジアの非英語圏はオグデンにとって BE 普及の試金石であったとみられる。だとすれば、当時の日本の教育現場を悩ませていた非効率的な英語教育が、オグデンの目にどのように映っていたのかということは重要な課題といえるだろう。先行研究ではあまり検討されていない日本に関する記述に着目することで、オグデンの日本への「まなざし」を明瞭にしたい。

使用する史料は主に 1930 年代初頭の *Psyche* にオグデンが執筆した論文、BE の概説書である *Basic English*、エスペランティストたちへの回答書とされた *Debabelization* 等である。

史料には「国際補助語」「国際語」「普遍言語」「人工言語」「合成語」「第二言語」「計画言語」といった類似の用語が散見する。本来それぞれが意味するところは重なりつつも微妙にずれていると思われるが、本稿では特別に使い分ける必要がある場合を除き、既存の自然言語の補助手段を意味する「国際補助語」に統一して論じる。また、「自然言語」の対立概念としての「人工言語」はそのまま用い、自然発生的に形成されたと考えられる「民族語」「国語」「現地語」等は「自然言語」に含める。以下、すべて括弧を外して論じることとしたい。

## 2. BE による人工言語観の相対化

### (1) サピアのエスペラント志向

BE が考案される以前の 19 世紀末頃には、エスペラントに代表されるような人工言語を国際補助語に位置付けようとする活発な動きがあった。後述するように、オグデンはこうした人工言語の代表格ともいえるエスペラントに対抗するために BE を考案したのである。

ここでエスペラントに簡単に触れておこう。エスペラントは、1887 年にポーランドの眼科

医だったザメンホフ (Ludwig L. Zamenhof, 1859–1917) が国際的平和主義の理念のもとに国際補助語たることを目指して考案した人工言語である。ラテン系の語彙を根幹とし 900 余りの単語 (発表時) ときわめて簡単な文法構造からなり、原理的には自然言語特有の動詞の不規則性が存在しないことや綴り字と発音の不一致がないことが強みである。

米国の著名な言語学者サピア (Edward Sapir, 1884–1939) も平等主義の点から人工言語に軍配をあげていた<sup>10</sup>。まずサピアの論考を再考しよう。彼は 1931 年 4 月号の *Psyche* に “The Function of an International Auxiliary Language” (「国際補助語の役割」) と題した論文を発表した。その目的は国際補助語たる要件を満たすのが、人工言語と簡素化を含む自然言語のどちらなのかを追究し、国際補助語の性質を明らかにすることにあつた。以下は、英語という自然言語を例に、それを国際補助語に採用することへの疑問を呈した記述部分である<sup>11</sup>。

英語の国際補助語化を促進すべきだ。現在、英語はすでにどの言語よりも広い範囲で話されているし、商用と旅行の世界においても広がりを見せている。だが、こうした考え方は、現実を疑わずに、早計に根拠を与えるだけで、国際補助語の問題へのよりふさわしい解決とならない。最小言語であるリンガーフランカの類よりも。この不変の精神を議論する人たちはいつも自分たちのことを合理的だと思いがっていて、この多くの合理主義者たちはホスト抜きで (自分勝手に一注、広川) 議論する傾向がある<sup>12</sup>。

サピアは英語が事実上の国際補助語となっていることや英語のフォーマルな構造上、その学習が誰にとっても比較的容易であることを認めつつ、英語の使用範囲の広さをもって国際補助語に位置付けるという考えに批判的な姿勢を示した。また、国際補助語たる根拠のない英語を、なお推進しようとする人たちの他者を見下す態度を厳しく批判している。

その上で、サピアは国際補助語の条件として、第一に、簡潔性、規則的、理論性、豊かさ、創造性をもつものであること、第二に、個人の最低限の能力から学習を開始し最大限の効果が得られるものであること、第三に、すべての自然言語に対して試金石となり、どの言語にも翻訳しやすいものであることの 3 つを提示した<sup>13</sup>。

## (2) サピアへの反論

これに対抗してオグデンは、同じ号の *Psyche* に “Debabelization: A Reply to Professor Sapir” (「バベルを止めること：サピア教授への反論」) と題した論文を発表した<sup>14</sup>。なお、Debabelization とは、babel (「バベル」、「言葉の混乱」との意) に由来するオグデンの造語である<sup>15</sup>。

この記事においてオグデンは冒頭で「国際補助語の理論上の望ましさについては、意見の違いはほとんどない」としながらも、人工言語と自然言語とのいずれかを国際補助語にすることについての「自論」を展開している。

まず、人工言語の代表例として、①最も成功した現存のエスペラント、②エスペラントの改

良版であるイード (Ido)、③イードの洗礼名としてのパーフェクト (Perfecto)、④イエスペルセン (Jens Otto Harry Jespersen, 1860-1943) 考案のノヴィアル (Novial)、⑤ノヴィアルに関連するソヴィアル (Sovial)、⑥ジョビアル (Jovial) の6つを挙げ、これらの人工言語は「現存するバベルに付加される」として国際補助語に位置付けることを否定した。オグデンは、人工言語は「バベル化」を食い止めることができないと主張したのである。イードについては「まだ1000人にしか使用されていないが、最も人々の興味を引きつける理論的な完全言語 (theoretically perfect languages) である」と高く評価しながらも結局、認めていない<sup>16</sup>。

続いてオグデンは、「バベル化」する人工言語の代わりに自然言語である英語を国際補助語化する動きについて論を展開する。「英語以外の自然言語の国際補助語化は現在のところ、本気で考えられていない」としたうえで、①綴り字の不規則性の改良を目指したアングリック (Anglic)、②他のすべての言語との同化を目指したパシック (Pasic)、そして③BEの3つを英語の国際補助語化運動の象徴として紹介しつつ、「もし地球上の人々の半分が英語を国際補助語だとみなすなら」、「90パーセントの労力を減らす簡素化された形態があと半分の人たちのために使えるならば」と必要条件を示したうえで、BEが国際補助語として適切であると力説する。

「アングリックに甘んじるのであれば」との文言からは、オグデンが暗に英語の綴り字改良案を否定していたことがわかる。BEに綴り字の不規則性を残存させたのは、オグデンが綴り字改良案も認めていなかったからに他ならない。そして、サピアのことばを借りながら以下のように皮肉たっぷりに人工言語を批判したのである。

エスペラントを促進すべきだ。すでに多数の人がエスペラントに転向しているし、エスペラントは商用と旅行の世界にも広がる兆候があると言われている。だが、こうした早計な提案は、現在の国際補助語の問題へのよりふさわしい解決とならない。間に合わせの雑種であるリンガーフランカの類よりも。エスペランティストたちはいつも自分たちを合理的だと思い上がっていて、この多くの合理主義者たちは、ホステス (注一傍点、広川) と議論する傾向がある<sup>17</sup>。エスペランティストたちは、ほとんどがもともとヨーロッパ系の言語を母語とする人たちで、自分たちの言語は普遍的な性格なのだという深い幻想のもとにある<sup>18</sup>。

オグデンは、先のサピアの記述の「英語」の部分で「エスペラント」に置き換えながら、英語を国際補助語とする根拠はないというサピアの指摘になぞらえて、英語同様にエスペラントを国際補助語とする根拠もないと訴えた。

実際、1900年代初期に起こったエスペラントとイードの対立においては、エスペラント運動の指導者の25パーセントがイードに鞍替えしている。この「イード事件」においては、多くのエスペランティストがエスペラントへの忠誠を誓ったのではあるが、人工言語運動が内部

崩壊の恐怖につねにさらされていることを意味していた<sup>19</sup>。

オグデンは、人工言語が上記のように覇権をめぐる争われ、その指導者たちが権威的にふるまうようになることを根拠に、人工言語は中立的で国際的な相互理解に貢献するといった人工言語観に一石を投じたものとみられる。オグデンは人工言語の限界に気づいていたからこそ、自然言語である BE を考案しエスペラントに対置させたのだと考えられる。

さらに、リンガーフランカを「間に合わせの雑種」と皮肉たっぷりに表現している点に、綴り字改革のアングリックに限らず、混成語であるパシックをも否定していたことが見て取れる。英語の改良論を全般的に否定していたとも解釈できる。オグデンにとって BE と英語の改良論とは、明確に違っていた。オグデンにとって簡素化とは改良と同義ではなく、BE はあくまで自然言語だったのである。それゆえ、オグデンは BE の理論修正を一切、認めなかったのである<sup>20</sup>。

この *Psyche* に掲載されたオグデンの論文は、そのタイトルを冠した *Debabelization* (1931 年) に収められた。当該書はエスペランティストへの回答書として刊行された。

### 3. オグデンの日本への「まなざし」

#### (1) BE の「売込み」

本章では、オグデンが東アジアの非英語圏である日本の英語教育をどのようにみていたかを解明する。前述のように、*Debabelization* (1931 年) はエスペランティストへの回答書として発行されたが、その内容はエスペラント批判に限らず多岐に亘っている。たとえば、「愛国心」(National Pride) の部分には、中央ヨーロッパ、スペイン、イタリア、スカンジナビア、インド、中国とならんで、日本の英語教育について紹介されている<sup>21</sup>。

そこではまず、カナダ政府の高官であるジョン・マーフィー (John Murphy) がある講演で述べた日本に対する感想が引用されている。マーフィーは、1929 年に東京で開催されたはじめての万国工業会議 (World Engineering Congress) にカナダ代表として出席したのだが<sup>22</sup>、そのときの様子を次のように語っている。「この会議には 900 もの論文が提出されたが、そのうちの 400 は日本の代表者からのものだった。会議には日本の皇族も出席した」。オグデンはマーフィーが語った「日本人」の様子を紹介しつつ、さらにこの会議について報じた *Ottawa Citizen* 紙の記事を引用し、会議は英語で行なわれ一語も日本語に訳されなかったことも紹介した<sup>23</sup>。日本にも優秀な英語の使い手が存在することを暗に示していたと思われる。

ところがオグデンは、「だが、現在日本で必修科目とされている英語の教授法は失敗であると日本を訪れた者は皆、報告している」と続けている<sup>24</sup>。日本語が子音で終わることがないことを例に、伝統的な言語構造に英語教育の失敗の原因があるとし、当時、日本の文部省顧問で英語教授研究所所長として英語教育問題に尽力していたパーマー (Harold E. Palmer, 1877 - 1949) の語彙選定 (3000 語) について「この多大な不合理を取り除くかもしれない。だが、もっと抜本的な方向付けが必要だ」として、それが非効率性を根本から是正するような改革とはな

らないことを主張した。そのうえで、*Japan Chronicle* 紙が「BE は、語彙と文法の両方において実用性の高い最小限のものに減じるようだ」と報じたことを取り上げて、パーマーの語彙選定よりも BE の方が日本の英語教育問題に効果があることをアピールした。さらに、オグデンは日本の英語教育を改革するにはパーマーの語彙選定は疑わしいと断言し、パーマーが所属する英語教授研究所のメンバーも BE を研究することが有益であると言い切ったのである<sup>25</sup>。

オグデンは、*Japan Chronicle* という日本の新聞社が BE を取り上げたことを、BE の商機と捉えたのかもしれない。BE の動詞の削除に関するルールの一節を引いて、「とりわけ、商用において外国との通信を望むものは、自分自身を BE で表現するときその価値に気付く」、「BE は生徒の文学的なスタイルを発展させることができると言っても過言ではない」、「BE は疑いなく彼らを英語のできる人にする」<sup>26</sup> と日本の生徒が BE を学ぶことの利点を喧伝した。

上述の内容からもう一つわかることは、BE が、生徒・学生だけに限らず、大人も対象にしていたことである。「BE はたんに、現在、英語を学んでいる人をできるようにするだけではない。過去にどのような方法で学んだ人にとっても、また、まだ完全にマスターしていない人にとっても、よりわかりやすいものとなるに違いない」とも述べて、ひろく一般の人々も対象にしている<sup>27</sup>。パーマーの語彙選定が日本の中学生のみを対象としたのに対し、オグデンの BE は中学生以上一般の人たちも含んでいた。ここに、BE をたんなる外国語の教授法としてではなく、国際補助語として日本に導入しようとしたオグデンの意図が見て取れる。

オグデンはまた、エスペラントにも当然、批判的に言及している。「エスペラントは国際補助語の王道であるかにみえた。しかし、人々は十分に反応しなくなっている。その上、アジアのエスペランティストたちの、エスペラントは有用な国際補助語になるだろうという期待とヨーロッパ系言語全体への鍵となるだろうという希望は期待外れに終わったかのようなようである」と、エスペラントに将来性がないことを仄めかしつつ、「BE は最初から現実の言語だということに強みがある」と自然言語の優位性を主張した<sup>28</sup>。

日本では 1906 年にエスペラント協会が設立され、大正デモクラシーのなか、知識人や生徒・学生間にエスペラントが浸透していた。このことを知っていたのか、オグデンは、「日本の大都市におけるほとんどの中学校でエスペラントが教えられている」<sup>29</sup> と述べており、日本におけるエスペラントの普及率を意識していたこともわかる。

オグデンは当然のことながら、BE と愛国心との関係にも触れている。「もし英語が、ラジオ、商業、そして科学の普遍言語として東洋 (East) にとっても正当な言語であることを証明するものでなければ、ドイツ語やスペイン語、エスペラント語でさえも好むのは問題ではない」としたうえで、「だが、BE の推進者たちは偽の愛国心という障害には遭遇しない」と、BE が「真」の愛国心と調和的であることを強調した。

以上のようにオグデンは、パーマーの語彙選定とエスペラントを否定しながら、愛国心とも齟齬が無いものとして国際補助語としての BE を日本に売り込もうとした。オグデンは、当時の日本の英語教育問題を解決するのは BE だけであると主張して、日本への BE 普及を目論ん

でいたのである。

## (2) 漢字廃止への提言

実はオグデンは、日本語にも言及している。1929年に *Studies in English Literature* (『英文学研究』) に公表された市河三喜(東京帝国大学教授)の“English Influence on Japanese”(「英語の日本語への影響」)<sup>30</sup>は、日本語の英語からの借用語についての研究である。数ヶ月にわたって新聞と雑誌に現れた外来語をリストアップしたもので、英語が日本語に同化した場合の発音の変化にも言及している。オグデンはこの市河の研究論文を引用して、「日本には、独特の英文法と統語論に加えて、すでに1400語以上もの英語からの借用語があり、日本は中国よりも多くの英語を外来語として受け入れている」<sup>31</sup>と日本語が中国語よりも英語を受容れ易い性質であることを訴えた。

「英語を知らない日本の読者は、もはや新聞の内容を適切に理解できなくなっている」とも述べて、市河が中国語への回帰に反対していることに賞賛を送っている<sup>32</sup>。表意文字が日本の発展に重要な役割を果たしてきたことを認めつつも、「中国の影響は、文明化された社会においては、もはや望ましいものではない」とし、「日本は象形文字の重荷を取り除き、国際的な潮流によって外国の要素をいつでも歓待すべきだ」と提言している<sup>33</sup>。「日本は象形文字の重荷を取り除き」という言葉から、漢字の廃止を提言していたことがわかる。オグデンは、BEの導入にあたって日本語の改革にまで言及したのである。

## 4. おわりに

最後に、第一と第二の課題を振り返りながら、それぞれの成果を総合してみたい。

第一の課題においては、オグデンがエスペラントに取ってBEを対置した理由の解明を試みた。これは人工言語の「バベル化」という限界を示し、人工言語観を相対化することにあつたといえる。そうすることが、自然言語である英語を国際補助語に位置づける際の大前提だったと思われる。

しかしオグデンは、アングリックやパシックといった英語の改良論や混成語は認めなかった。つまりオグデンは、現実に通用しやすいように手を加えるのであれば、人工言語も自然言語である英語の改良論も大した違いはないのだと考えていたことになる。そして、「純正」の自然言語であるBEのみが国際補助語としての要件を満たすと考えていたのである。またオグデンは、極端なまでに語彙を簡素化し理論修正を一切、認めないことでBEの「バベル化」は防げると考えていたと思われる。

第二の課題においては、オグデンの日本への「まなざし」の解明を試みた。オグデンは、パーマーによる英語教育改革とエスペラントの導入のいずれも否定して、日本の英語教育の改善のためには自身の考案したBEの方が効果的だと強くアピールした。BEの対象は生徒・学生のみならずひろく一般の人々も含み、愛国心とも調和するものだと強調された。さらに注目すべ

きことに、BE の導入にあたっては日本語の漢字の廃止にまで踏み込んでいた。

以上を総合すれば、オグデンは人工言語観を相対化しつつ、自然言語である BE に国際補助語としての正当性を半ば強引に与えたということになる。そのうえで、日本という東アジアの非英語圏における英語教育の改善を理由にして、BE の正当性をさらに強めようとしていたと捉えられる。とりわけ、日本語の改革にまで踏み込んだ点にオグデンの BE 普及戦略が見て取れる。

前述のように、BE は占領期日本の英語教育改革において、GHQ/CI&E の主導により新制中学校の英語教科書執筆の際に参照されている<sup>34</sup>。CI&E は BE のどのような点に注目していたのだろうか。本稿の結果を踏まえつつ、今後はこの点の究明を課題としたい。

なお、CI&E のトレーナー (Joseph. C. Trainor) は、文部省との協議に携わり占領期日本の英語教育改革を主導した人物である<sup>35</sup>。彼は 1936 年発行の *Psyche* に寄稿しており、オグデンとは同人だったことが確認できる<sup>36</sup>。これは、CI&E が BE を指示した理由を解明するうえで有力な手がかりである。

## 【付記】

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C）、研究代表者：広川由子、課題番号：16K04517）の成果の一部である。

## 注

- 
- 1 C. K. Ogden, *Basic English: a general introduction with rules and grammar*, K. Paul, Trench, Trubner, 1932.  
A. P. R. Howatt, *A History of English Language Teaching*, Oxford University Press, 1984, pp. 283-288.  
相沢佳子『850 語に魅せられた天才 C. K. オグデン』北星堂書店、2007 年、7～10 頁等を参考に 3 つの目的を要約した。BE は、とりわけ、極端なまでに削減された動詞 16 語にその最大の特徴がある。なお、科学、詩、聖書などの特別な分野には 850 語以外にそれぞれ専門的語彙が選定されている。
  - 2 当初は、“PANOPTIC ENGLISH”（すべての語が一目でわかる英語）と題して公表された。*Psyche*, Vol. 9, No. 3, (London, 1931), Frontispiece.
  - 3 広川由子「占領期における対日英語教育政策の歴史的基盤—ロックフェラー・ファンデーションを中心に—」教育史学会『日本の教育史学』第 58 集、2015 年。
  - 4 相沢前掲書、71 頁。
  - 5 同上。
  - 6 A. P. R. Howatt, *op. cit.*, p. 284. ホワットも、BE はエスペラントやノヴィアル等の人工言語に抵抗するために考案されたと簡単に記しているだけである。
  - 7 K. Schubert, “Interlinguistics—its aims, achievements, and its place in language science”, in Klaus Schubert (ed.) *Interlinguistics: Aspects of the Science of Planned Languages*, Mouton de Gruyter, 1989, pp. 9-10.



- 8 アンドリュー・ラージ著、水野義明訳『国際共通語の探求：歴史・現状・展望』大村書店、1995年、220～235頁。(原著 A. Large, *The Artificial Language Movement*, Oxford: Basil Blackwell, 1985, pp. 160-176.)
- 9 相沢前掲書、114頁。平田論治「岡倉由三郎の「国際語としての英語」をめぐる思想と行動—1930年代初めのベーシック・イングリッシュの受容を中心にして—」日本教育学会『教育学研究』第83巻第3号、2016年、16頁。オグデンは、当時日本の文部省顧問で中学校における英語教育に尽力していたパーマー (Harold E. Palmer) を介して、日本の英語教育事情を把握していた。
- 10 R. Darnell, *Edward Sapir: Linguist, Anthropologist, Humanist*, University of California Press, 1990, p. 274.  
相沢前掲書、71頁。
- 11 E. Sapir, “The Function of an International Auxiliary Language”, *Psyche*, Vol. 12, No. 4, 1931, pp. 4-15.
- 12 *Ibid.*, p. 5.
- 13 *Ibid.*, pp. 7-8.
- 14 C. K. Ogden, “Debabelization: A Reply to Professor Sapir”, *Psyche*, Vol. 12, No.4, 1931, pp. 16-25.
- 15 相沢前掲書、59頁。debabelizationの翻訳については相沢の「バベルを止めること」を踏襲した。なお、相沢は「言葉の混乱をなくすこと」とも訳している (113頁)。
- 16 *Psyche*, Vol. 12, *op. cit.*, p. 17.
- 17 先のサピアの英語を国際補助語に採用することへの疑問を呈した記述部分にある「ホスト抜きで議論する」を揶揄していると思われる。
- 18 *Psyche*, Vol. 12, *op. cit.*, p. 18.
- 19 ラージ前掲書、121～122頁。(原著 A. Large, *The Artificial Language Movement*, *op. cit.*, p. 83.)
- 20 相沢前掲書、10頁。
- 21 C. K. Ogden, *Debabelization: with a survey of contemporary opinion on the problem of a universal language*, London, Kegan Paul, 1931, pp. 134-139.
- 22 *World Engineering Congress list of members* (萬國工業會議會員名簿 B (List of foreign delegates and members)), Tokyo, 1929, p. 37 に Murphy, J. と記載あり。
- 23 C. K. Ogden, *Debabelization*, *op. cit.*, pp. 134-135. この会議は秩父宮雍仁親王を総裁として開催され、実際に日本の代表者から371の論文が提出されている。*World Engineering Congress, Tokyo 1929* (萬國工業會議: proceedings volume 1 (General reports)), Tokyo, 1931, 目次部分。
- 24 C. K. Ogden, *Debabelization*, *op. cit.*, p. 135.
- 25 *Ibid.*, pp. 135-136.
- 26 *Ibid.*, p. 136.
- 27 *Ibid.*, p. 136.
- 28 *Ibid.*, pp. 136-137.
- 29 *Ibid.*, p. 101. 実際には 에스ぺ란토 が教育課程に導入されたことはないので、ここでは部活動などの教科外活動のことを指していると思われる。
- 30 Sanki Ichikawa, “English Influence on Japan”, *Studies in English Literature*, Vol. 8, No. 2, 1928.

- 31 C. K. Ogden, *Debabelization*, *op. cit.*, p. 103.
- 32 *Ibid.*, pp. 137-139.
- 33 *Ibid.*
- 34 広川前掲論文。
- 35 広川由子「占領期日本における英語教育構想—新制中学校の外国語科の成立過程を中心に—」日本教育学会『教育学研究』第 81 巻第 3 号、2014 年。
- 36 J. C. Trainor, "The Contributions of Alfred Korzybski", *Psyche*, Vol. 16, 1936, pp. 165-177.